



TITLE:

[紹介] 湖北省三國關係遺跡

AUTHOR(S):

上野, 隆三

---

CITATION:

上野, 隆三. [紹介] 湖北省三國關係遺跡. 中國文學報 1989, 40: 167-188

ISSUE DATE:

1989-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177451>

RIGHT:

## 紹介

### 湖北省三國關係遺跡

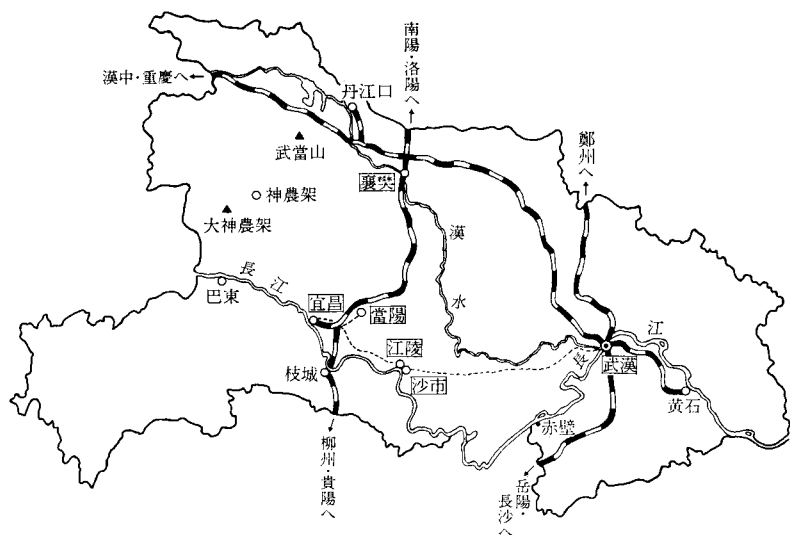
中國には『三國志』、『三國演義』にちなんだ遺跡が数多くある。しかし三國時代は今から千七百年以上前の時代であり、當然その當時のまま残っているものはほとんどない。『三國志』に基づいて復元されたものもあれば、中には小説『三國演義』、或いは講談や戯曲などの三國故事をもとに後の時代に作られたものもある。この拙文の題名を「三國志關係遺跡」、或いは「三國時代遺跡」としなかったのはそういう理由からである。三國時代に重要な役割を持っていた地域は現在の中國全土に及ぶわけだが、三國入り亂れての激しい攻防があったのがこの湖北省である。従って現在の湖北省は三國時代には非常に重要な地域であり、そのため三國關係の遺跡が大變多い。私は京都大學大學院の學生であった一九八七年九月から八九年三月まで江蘇省の南

## 紹介

京大學に留學し、その間八八年二月から三月にかけて、寒暇（冬休み）を利用して湖北省を旅行し、數多くの三國關係遺跡を參觀する機會を得たので、それらの現狀を紹介しつつ多少の考察を加えてみたいと思う。

湖北省の省都は武漢である。私の住んでいた南京からは直線距離にすれば比較的近いのだが、直接行ける列車がない。飛行機は満席、船なら乗り換えなしだが、上りなので二、三日かかる。結局、列車を乗り繼いで行くことにした。南京を夕方に出る直快（急行）で鄭州へ。鄭州には翌日の早朝到着、すぐ隣りのプラットフォームに停車していた北京發廣州行の特快（特急）に飛び乗り、中で切符を買い足した。乗り繼ぎの時間が五分足らずで済み、晝過ぎには武漢市の武昌驛に着いていた。

武漢市は漢水が長江に流れ込みY字形になっている地點。武昌、漢口、漢陽の三鎮が合併して一九四九年に生まれた市である。後漢の時代は荊州江夏郡。『三國志』によれば、荊州の牧劉表の長子劉琦が江夏太守であった。そして劉琦



湖北省地圖

が江夏太守になったのは諸葛亮の進言によるものであったという。琦は父表が弟琮を溺愛していることに不安を感じ、諸葛亮に助言を求めるが、その度にかわされる。そこで、

琦乃將亮游觀後園，共上高樓，飲宴之間，令人去梯，因謂亮曰：「今日上不至天，下不至地，言出子口，入於吾耳，可以言未。」亮答曰：「君不見申生在內而危，重耳在外而安乎？」琦意感悟，陰規出計。會黃祖死，得出。遂爲江夏太守。<sup>(1)</sup>  
(諸葛亮傳)

この話は『演義』にもある(第三十九回)。そして劉表の死後、劉琮は曹操に降り劉琦は劉備と連合する。當陽長坂で曹軍に敗れた劉備らは、劉琦のもとに據り夏口に駐屯する。その夏口が今の武漢の漢口であるという。

武漢の代表的な名所は黃鶴樓であらう。古來數々の名詩の舞臺となった黃鶴樓は武昌側にあり、その金色に輝く五層の偉容は人を壓倒するものがある。「黃鶴」という名については、仙人の子安が黄色い鶴に乗ってこの地を通ったという話が伝えられている。

夏口城據黃鶴磯，世傳仙人子安乘黃鶴過此上也。<sup>(2)</sup>

〔『南齊書』州郡志下〕

あるいは三國時代蜀の費禕（字は文偉）がやはり黄色い鶴に乗って飛來し、ここで休んだという傳説もある。

黃鶴樓在縣西二百八十步。昔費文禕登仙，每乘黃鶴於此樓憩駕，故號爲黃鶴樓。<sup>(3)</sup>〔『太平寰宇記』鄂州・江夏縣〕  
但、『寰宇記』は諱と字を混同。

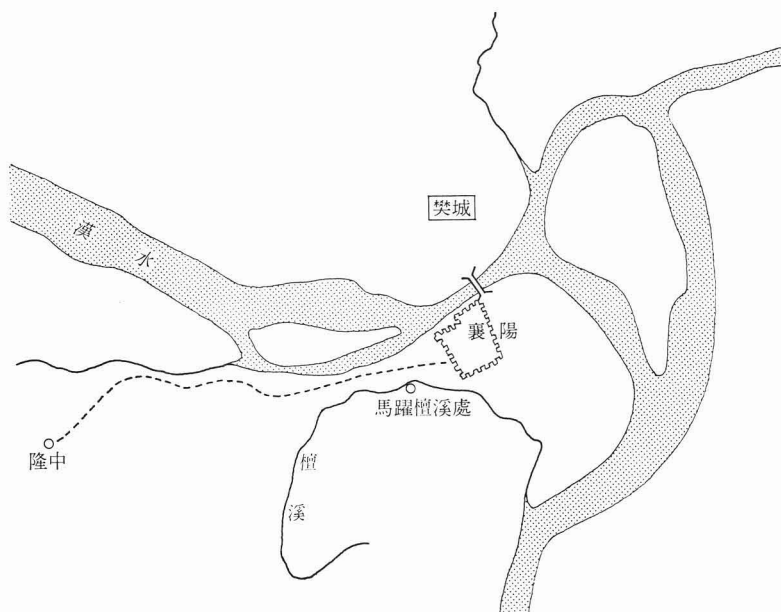
黃鶴樓は三國吳の黃武二年に建てられたと伝えられるから、三國の遺跡と言えなくもない。また、元雜劇に『劉玄德醉走黃鶴樓』があり、周瑜の策で劉備が黃鶴樓に閉じ込められるが諸葛亮の機轉で救われるという内容である。ただこの『黃鶴樓』劇の話は『演義』にはない。しかしともかく、かつて黃鶴樓があったのは現在の場所ではなく、今の武漢長江大橋の橋脚のあたりらしく、また清代以前の黃鶴樓は現在のものよりはるかに規模も小さく外觀も異なるものであったようである。我々の感覚から言うとう出来る限り元の形に近く復元するのが普通だと思うのだが、中國ではかつての封建國家の時代よりも解放後の方がより立派な建物を

作れるのだということを強調するためか、こういう事がよくあるようだ。

武漢から快客（急行）で六時間ほどで襄樊に着く。襄樊市は漢水をはさんで南の襄陽と北の樊城が一九五〇年に合併してできた市である。襄陽城の城壁は明代のものがほぼ完全に残っている。襄陽はいつの時代も重要な都市であった。漢水に臨む交通の要地であることがその最も大きな要因であろう。襄陽城は東南西の三方を「護城河」つまり堀で囲まれ、北方は漢水が自然の堀となるわけだ。今でこそ襄樊漢江大橋という立派な橋がかかっているが、昔は北の樊城側から渡ってくるのは容易ではなかったろう。襄陽城の北側の城壁の上に立ち漢水、樊城を眺めると、劉備が曹操に追われて樊城より脱出する際、樊城の人民達が劉備を慕って後を追ひ、泣きながら川を渡ったという場面が思い起こされる。

先主屯樊，不知曹公卒至，至宛乃聞之，遂將其衆去。<sup>(4)</sup>

〔『三國志』先主傳〕



襄樊市地圖



襄陽城城壁

兩縣之民，齊聲大呼曰：「我等雖死，亦願隨使君！」  
即日號泣而行。扶老携幼，將男帶女，滾滾渡河，兩岸  
哭聲不絕。<sup>(5)</sup>

〔三國演義〕毛本第四十一回

襄陽は後漢の時代には荊州の中心地。従つて荊州刺史劉表  
もここにいたのだが、劉表の息子劉琮が降伏し曹操が襄陽

城を手に入れて以後、州単位としての荊州は北半分を曹操が治め、南半分は孫權と劉備が奪いあう形となった。劉備が西川を攻める間關羽が治め、結局吳軍によって奪われた荊州の中心は、後に紹介する江陵であり、西晉の時代になつて荊州は分斷されることがなくなったが、やはり中心は江陵であつて、これ以降現在まで荊州と言えば江陵、ということになる。

樊城側には三國關係の遺跡はない。樊城は先ほど述べたように劉備らが一時駐屯した地であるが、關羽が曹仁を攻め于禁を捕えたのも、ここ樊城である。

（建安二十四年）是歲，羽率衆攻曹仁於樊。曹公遣于禁助仁。秋，大霖雨，漢水汎溢，禁所督七軍皆沒。禁降羽，羽又斬將軍龐惠。<sup>(6)</sup>  
（『三國志・關羽傳』）

大雨による洪水で曹軍は大敗し于禁も捕えられたのだが、『演義』では、關羽が水攻めで勝利したことになっている（毛本第七十四回「關雲長放水淹七軍」）。史實をヒントに創作されたものであろう。

襄陽城の南西に劉備馬躍檀溪遺跡がある。

## 紹介

（裴注）世語曰：備屯樊城，劉表禮焉，憚其爲人，不甚信用。曾請備宴會，蒯越、蔡瑁欲因會取備，備覺之，僞如廁，潛遁出。所乘馬名的盧，騎的盧走，墮襄陽城西檀溪水中，溺不得出。備急曰：「的盧，今日厄矣，可努力！」的盧乃一躍乃三丈，遂得過。<sup>(7)</sup>

（『三國志・先主傳』）

玄德着慌，縱馬下溪。行不數步，馬前蹄忽陷，浸濕衣袍。玄德乃加鞭大呼曰：「的盧，的盧！今日妨吾！」言畢，那馬忽從水中涌身而起，一躍三丈，飛上西岸，玄德如從雲霧中起。<sup>(8)</sup>  
（『演義』毛本第三十四回）

檀溪については『水經注』に詳しい。

沔水又東合檀谿水。

（注）水出縣西柳子山下，……西去城里餘，北流注于沔。一水東南出，應劭曰：城在襄水之陽，故曰襄陽也。是水當即襄水也。<sup>(9)</sup>  
（沔水・中）

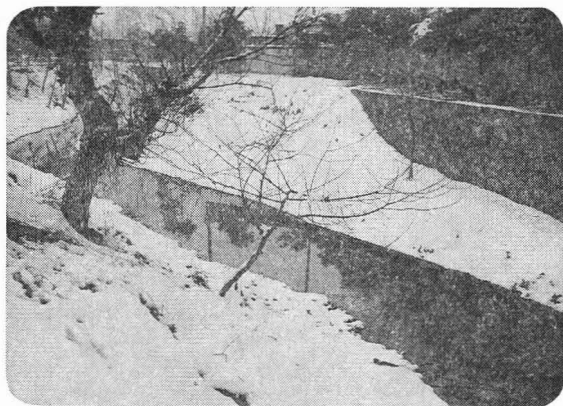
今の檀溪は幅が狭く流れも遅い川であった。その川のそばの岩壁面に「檀溪」の二文字が刻まれている。案内してくれた人によれば宋代のものとのことだが、確認はできなかった。

った。劉備が的盧にまたがり檀溪を飛び越えた後、『演義』では司馬徽と會うことになっているので、「檀溪」と書かれた岩壁の裏はどんなところかと回り込んでみると、ブルドーザーが地ならしをしており建物が建つようであった。この檀溪は襄陽城の南側を東に向かって流れているが、『水

經注』には城の西一里を北へ沔水に注ぐとあるから、今とは川筋が違うらしい。『襄陽府志』（清光緒十一年・中國方志叢書三六二）には「檀溪今已乾涸。」（卷二・山川）とあり、同じ『襄陽府志』の地圖を見ると、現在の檀溪の位置に川はあるが襄渠という名がついている。そして「襄水即今襄渠。」（卷二・山川）とあり、『水經注』の中

で應劭が襄水という名であるはずだと言う檀溪の支流は今の襄渠である、としているのである。どうやら現在の檀溪は比較的最近名付けられたものようだ。

襄陽城より西へ車で三十分。古隆中がある。諸葛亮が草廬を結んでいたと言われる所である。現在ここは「隆中風景區」に指定され、三顧堂、武侯祠など多くの建造物があるが、ほとんどが清代以降に作られたもの。躬耕田に至っては

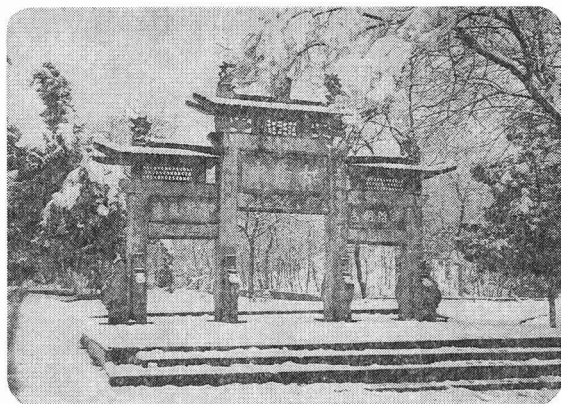


現在の檀溪

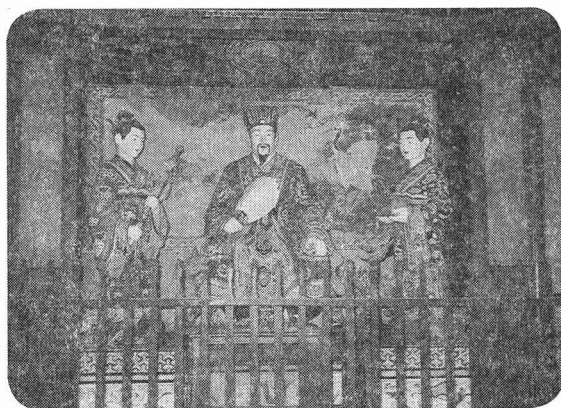


馬躍檀溪遺跡

つい最近映畫撮影用に作られたものらしい。古隆中の入口に立つ牌坊は眞中に大きく「古隆中」と刻まれている。三顧堂は武侯祠の横にある四合院作りの建物で諸葛亮像や詩文の石刻が並べられている。武侯祠は明代のものとのこと、中に羽扇綸巾の孔明像がある。臥龍深處



古隆中の牌坊



武侯祠の諸葛亮像

という建物には膝をかかえた孔明像、彼の友人の石廣元、崔州平、孟公威、司馬徽、徐庶らの像などがある。

私が古隆中を訪れた時はちょうど雪であった。『演義』では、劉備たちが二度目に諸葛亮の廬を訪れた時に雪が降っていた。

時值隆冬、天氣嚴寒、彤雲密布。行無數里、忽然朔風凜凜、瑞雪霏霏、山如玉簇、林似銀妝。<sup>10)</sup> (毛本第三十七回)

このあと三度目にして、ようやく會えるわけだが、正史でも劉備は諸葛亮を三度訪問している。

由是先主遂詣亮，凡三往，乃見。<sup>11)</sup>

『三國志・諸葛亮傳』  
「諸葛亮傳」によれば、亮はもともと徐州琅邪國陽都縣の



人であった。幼くして父を亡くし、叔父の玄が揚州豫章郡の太守となったのに同行した。玄は豫章太守を免ぜられて舊知の劉表の下に身を寄せ、玄の死後亮は弟の均とともにこの地で暮らしていた。

玄卒，亮躬耕隴畝，好爲梁父吟。

（裴注）漢晉春秋曰：亮家于南陽之鄧縣，在襄陽城西二十里，號曰隆中。<sup>12</sup>（諸葛亮傳）

當時、南陽郡は宛縣（現在の南陽市）を中心に南端は襄陽附近であつたようで、そのため「南陽」という地名が裴注に出てくるわけである。ところが河南省南陽市では現在の南陽市こそが諸葛亮の故里であると主張しており、武侯祠・三顧堂など襄樊の古隆中と同様の建造物が、臥龍崗という場所にあるらしい。建物が一體いつの時代のものか、臥龍崗という地名がいつつけられたのか、私は行っていないのでよくわからない。しかし、もし裴注に南陽郡とあるのを根據としていたのであれば、同じ文章に襄陽城の西二十里とあるのだから、やはりこの襄樊の古隆中のあたりが本物であると考えの方が妥當であろう。もちろん今建物などが

ある場所に諸葛亮が住んでいたかどうかはわからないが。南陽市は襄陽より北へ直線距離にして約百五十キロ離れた所である。

襄樊市から快客でまた六時間。宜昌市は長江に面した細長い街である。宜昌は三國時代は夷陵と呼ばれた。有名な夷陵の戦いの舞臺である。關羽の弔い合戦に燃える劉備は大軍を率いて出陣。若い陸遜に指揮された吳軍と交戦。蜀軍は大敗、劉備死去の原因ともなったのである。

（章武）二年春正月，先主軍還秭歸，將軍吳班、陳式水軍屯夷陵，夾江東西岸。……夏六月，黃氣見自秭歸十餘里中，廣數十丈。後十餘日，陸議大破先主軍於猇亭，將軍馮習、張南等皆沒。<sup>13</sup>（『三國志・先主傳』）

陸議は陸遜の本名、猇亭は現在の宜昌市のやや下流らしい。中國觀光の目玉の一つ、三峽下りの船は今重慶から武漢までだが、かつては宜昌までだった。朝まだ暗いうちに重慶を出航。蜀軍の吳遠征の氣分を味わいながら川下り。翌日の早朝から瞿塘峽・巫峽・西陵峽の三峽を過ぎれば、宜

昌はもうすぐそこである。宜昌市に入る直前に葛州壩水利  
工程がある。水力発電などのため作られた、長江の流れを  
完全に堰きとめる巨大なダムである。ダムの前後で水の高  
さが違うので、船はロックゲートに入り、この中で下りの  
場合は水を抜き、上りの場合は水を加えて高さを合わせて  
から通過していく。水を抜かれて船がどんどん下がって  
いくという不思議な感覚が乗船客に大いに喜ばれるわけだが、  
この葛州壩の少し上流の岸壁に三遊洞という洞窟がある。

唐の白居易・白行簡・元稹がここに遊び詩を詠んだとい  
う古跡である。この三遊洞の上、長江を見下ろす崖っぷちに  
張飛擂鼓臺がある。張飛がここで水軍を訓練したというこ  
とらしく、張飛の石像や『漢張飛擂鼓臺』と記された石碑  
(どちらも近年のもの)がある。『宜昌府志』(清同治三年・  
中國方志叢書一〇二)には、

張飛擂鼓臺在三遊洞頂。土人傳、飛守郡日督兵於此。  
今故壘猶存。<sup>(44)</sup>  
(卷二・疆域)

とある。張飛は一時宜都太守となっている。

先主既定江南、以飛爲宜都太守、征虜將軍、封新亭

紹 介

侯、後轉在南郡。<sup>(45)</sup>

(『三國志・張飛傳』)

當時の宜都郡は現在の宜昌も含んでいたようなので、確  
かにその當時張飛がここで指揮をしたかも知れないが、この  
種の擂鼓臺、點將臺などは各地にあり、根據のあるものは  
あまり多くない。

また、擂鼓臺の少し上に建築中の建物があり、案内して  
くれた人に尋ねると劉封の館を復元しているのだという。

『宜昌府志』には、

劉封城在府西北二十里、三遊洞頂。漢昭烈帝章武初  
封守宜都郡所築。<sup>(46)</sup>  
(卷二・疆域)

とあるが、「劉封傳」によれば劉封は宜都郡からは北西に  
あたる上庸に孟達とともに駐留していたけれども、現在の  
宜昌附近にいたという記載はない。劉封の出身については  
「劉封傳」に、

劉封者、本羅侯寇氏之子、長沙劉氏之甥也。先主至  
荊州、以未有繼嗣、養封爲子。<sup>(47)</sup>

とある。この荊州は襄陽のことであるので宜昌とは関係な  
い。また『演義』でも樊城で養子にしたことになっている

(毛本第三十六回)。どうも劉封は宜昌とはあまり關係なさそうである。ちなみに劉封を養子にしたのは「劉封傳」では阿斗の生前だが、『演義』では阿斗の生後であるため關羽が「すでに世嗣がいるのに」と諫める。後に劉封が關羽を裏切る伏線のための創作かも知れない。

當陽縣は列車でもバスでも宜昌から襄樊の方向へ約二時間のところにある。當陽と言えば當陽長坂の戦いが有名である。

曹公以江陵有軍實，恐先主據之，乃釋輜重，輕軍到襄陽。聞先主已過，曹公將精騎五千急追之，一日一夜行三百餘里，及於當陽之長坂。先主棄妻子，與諸葛亮、張飛、趙雲等數十騎走，曹公大獲其人衆輜重。<sup>18)</sup>

(『三國志・先主傳』)

及先主爲曹公所迫於當陽長坂，棄妻子南走，雲身抱弱子，卽後主也，保護甘夫人，卽後主母也，皆得免難。<sup>19)</sup>

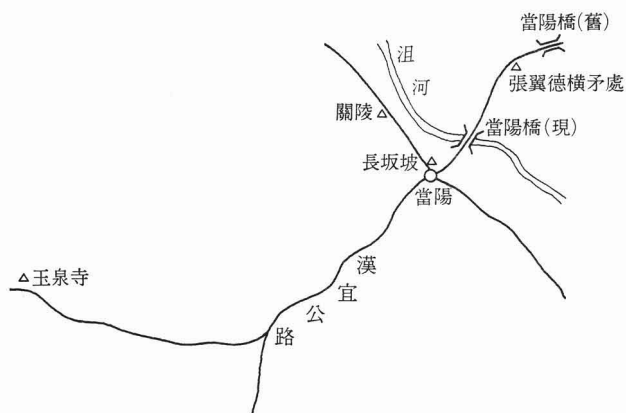
(『三國志・趙雲傳』)

(長坂は長阪ともいい、『三國志』でも混用されて

いる)

『演義』の長坂の戦いでも趙雲は大活躍する。趙雲は劉備の家族を保護する役目であったが、曹軍の襲撃を受けて家族を見失う。亂軍の中を駆け回り甘夫人を発見。さらに糜竺を救出し、甘夫人と糜竺を長坂橋の張飛に送り届け、再び糜夫人の搜索に向かう。途中曹操の寶劍を奪い、ようやく糜夫人を発見する。傷ついていた糜夫人は阿斗を趙雲にあずけ、枯井戸に飛び込み死ぬ。趙雲は阿斗を抱き、血路をひらいて長坂橋へ逃げ戻る。(毛本第四十一回、四十二回)

當陽を訪れる前は、長坂の戦いと言ってもこのあたりで、大昔に戦闘が行なわれただけだし、地元の人も全くそのようなことを知らないのではないか、長坂坡の場所を確認することもできないのではないか、とほとんど全く期待していなかったのだが、當陽の長途汽車站(長距離バス驛)から外に出るとすぐ目の前に、槍を持った騎兵の大きな石像が臺座の上に立っていた。これが阿斗を抱いた趙雲の石像だったのである。これには大きな驚きと感動を覺えた。もちろん作られたのはごく最近ではあるが。



當陽縣地圖

その汽車站の隣りに長坂坡公園なるものがあった。中に入ると「長阪雄風」と書かれた石碑、阿斗を抱いた趙雲の石像（コンクリートか？）などがある、あまり廣くない公

園であった。公園は民國二十三年（一九三四）に作られ荒れていたのを一九七九年に整備したものとのことだが、「長阪雄風」の石碑はもともと明萬曆十年（一五八二）に立てられたもので、『當陽縣志』（清同治五年・中國地志叢書一二六）の「縣城垣圖」にもこの石碑ははっきり描かれている。但し日中戦争期に行方不明となり、民國三十六年（一九四七）に復元したものだという。私が訪れたのはちょうど元宵節（舊曆一月十五日）の日で表通りはにぎやかだったが、この



長坂坡公園の碑

公園を訪れる人はまばらだった。公園の一角の魔術団のテントにだけ人が群がっていた。

阿斗を抱き命から戻ってきた趙雲を長坂橋で迎えた張飛は、あとは任せろとばかりただ一騎で橋上に立つ。曹操の大軍は橋までやってくるが、張飛の迫力と伏兵がいるのではないかという疑いから攻め寄せて来れない。そして「わしと一戦交える者はおらんのか！」という一喝に驚き、曹操軍は總くずれとなって退却する（『演義』毛本第四十二回）。この「張翼徳大鬧長坂橋」も長坂の戦いの、というより『演義』の見せ場の一つと言えよう。『三國志』にも、

先主聞曹公卒至，棄妻子走，使飛將二十騎拒後。飛據水斷橋，瞋目橫矛曰：「身是張益徳也，可來共決死！」敵皆無敢近者，故遂得免。<sup>20</sup>（張飛傳）

とある。ここに掲げた當陽縣地圖は、當陽訪問後に入手した『長坂坡』（湖北人民出版社、一九八六）というガイドブックの説明圖を、正確な地圖にあてはめて私が作成したものである。この本をあらかじめ持っていれば長坂橋を見に行ったのだが、地圖もなく、人に聞いたり勘に頼って歩いた

ので、石かコンクリート製の橋は見たが、まさかこれではあるまいと思い引き返してきた。これがどうも地圖にある現在の當陽橋（説明によれば當陽橋の俗稱が長坂橋なのだという）だったようで、そのさらに先に昔の當陽橋（いつの時代のものか不明）だという木の橋があり、そのそばに「張翼徳橫矛處」と記された石碑が残っているという。『當陽縣志』には、

橫矛處在治東北五里名官橋。乾隆二十四年邑令苗肇  
俗重修立石。<sup>21</sup>（卷二・古蹟）

とある。

當陽は幹線道路が交差する町であるため、長距離バスの本数は結構多い。しかし、町自體は小さく市街バスはもちろんない。従って公共の交通手段としては三輪車しかない。南京など一般の町の三輪車はバイクと自轉車の二種類あるが、いずれにせよ二人乗りである。しかし、當陽の三輪車は八人乗り。要するにリヤカーをバイクが引っ張るようなもので、そのリヤカー部分に四人ずつ向かいあって座る。安定が悪い上に道も悪く、轉がり落ちないようずつとどこ

かを握っておかなければならない。當陽の街から西北へ二キロほど、この三輪車で十分ほど行ったところに關羽の墓、關陵はある。

關羽は樊城にいる曹仁を攻めていたが、曹操が徐晃を援軍として派遣してきたため退却。しかし糜（糜）芳、傅士仁が吳軍に寝返り、江陵は孫權の手に。そして

權已據江陵、盡虜羽士衆妻子、羽軍遂散。權遣將逆擊羽、斬羽及子平于臨沮。<sup>23</sup>  
〔三國志・關羽傳〕

この關陵の築かれた年代は井上以智爲氏「關羽祠廟の由來並に變遷」〔史林〕第二十六卷によれば明成化三年（一四六七）であるという。臨沮は現在の當陽からは北西の比較的近いところなので、この地に關羽の墓があることは史實にかなっている。關羽は首を斬られ、その首は曹操のもとに送られた。

〔裴注〕吳歷曰：權送羽首於曹公，以諸侯禮葬其屍骸。<sup>24</sup>  
〔三國志・關羽傳〕

そのためこの當陽の關陵は胴塚で、洛陽にある關林は首塚であると言われる。

## 紹介

入口を入った所に碑亭があり、清道光十年（一八三〇）の『忠義神武靈佑仁勇威顯關聖大帝漢前將軍漢壽亭侯墓道』と書かれた石碑がある。次に石坊。『漢室忠良』と字が刻まれている。もともと明嘉靖三十七年（一五五八）に建てられたものを一九八四年に修復したとあるが、石の古さなどから見て、少なくとも『漢室忠良』の文字の部分は古いもののように入れた。『關陵』と書かれた門をすぎ、馬殿・拜殿・大殿・寢殿とつづく。これらの建物はみな新しく、まったくずれかけの建物もまだ残っており、一時荒れはてていたのを現在修復中であるようだ。大殿ののきに『威震華夏』と書かれた額が掲げられているが、これは清の同治帝の筆によるものだという。寢殿のうらが關羽の陵墓である。土盛りの高さは約七メートル。周囲は約五〇メートル。予想以上に大きいものであった。墓の前には墓碑があり、『萬曆丙子（四年・一五七六）夏日立、漢壽亭侯墓、勅字巡荆西道王鄧題』と刻まれている。『當陽縣志』には、

墓門有碑，書漢時官爵。<sup>24</sup>  
（卷二・陵墓）

とある。

洛陽の關林より規模は小さい。しかし、入口から陵墓までの建物の數などはあまり變わらない。それに現在の洛陽關林は完全に觀光地化しており、電氣じかけの「動く關羽像」などがあり、また本來侵さざるべき土盛りの上にも登れるようになっていて（私も登ったが）、當陽の關陵の方がはるかに墓らしい雰囲気ではあった。

街から例の三輪車でデコボコ道を三十分。玉泉山のおもとに玉泉寺はある。唐の高宗がこの玉泉寺と山東の靈岩寺、



關 陵

南京の棲霞寺、浙江天台山の國清寺を「四大叢林」と名づけたという、由緒ある寺である。現在も全國重點文物保護單位に指定されている。天王殿・大雄寶殿などのお堂と、門前には北宋代の鐵塔がある。この玉泉寺の門のそばを流れる小川がある。その川の上手に山道を歩いていくと二つの石碑が立っている。一つは細長く高さ二メートル餘りの四角柱の石柱で、頂きに石獸が天を仰いで鎮座している。そして「漢雲長顯聖處」と刻まれた裏には「萬曆丙辰（四十四年・一六一六）孟秋月吉旦建立」とある。もう一つはやや小さな石板で「最先顯聖之地」、清嘉慶二十二年に阮元の書いたものである。

『演義』では關羽の死後、その魂は玉泉山まで飛ぶ。ここで廬を結んでいた普淨という僧は以前關羽の危機を救った事のある人物で（第二十七回）、普淨に諭された關羽は成佛する。その後、關羽はしばしば玉泉山に靈驗を現わし住民を助けた（『演義』毛本第七十七回）。但、毛本二十七回では「普淨」、七十七回では「普靜」となっている。弘治本はどちらも普淨。



玉泉寺の石碑

私はこれらの石碑はこの『演義』の内容に影響されて書かれたものと思っていた。しかしどうやらそれだけではないうである。玉泉寺開基にまでさかのぼってみよう。

玉泉寺は隋の開皇十二年に天台宗の開祖智顗（智者禪師）が開いた。

玉泉寺在治西三十里。即智者禪師道場。隋開皇初勅

建賜寺額。

（『當陽縣志』卷九・寺觀）

宋代に『佛祖統紀』（大藏經二〇三五）という書がある。これは中國天台宗の立場から正史の體裁に倣って編纂された佛教の歴史書である。その卷三十九、法運通塞志第十七之六。

開皇十二年十一月。晉王廣總管揚州迎顗禪師。……

十二月。智者禪師至荊州玉泉山，安禪七日。感關王父子神力，開基造寺，乞授五戒。

關王とはもちろん關羽の事である。従って關王父子とは關羽、關平の事であろう。同じ『佛祖統紀』の卷五十三、歷代會要志第十九之三。

智者禪師至玉泉。感關王役神兵造寺。





卷四など)。

玉泉寺のガイドブックを見ると、玉泉寺は後漢の建安年間に普淨という僧がこの地に廬を結んだのが始まり、と書かれているが、これはおそらく『演義』に據っているのであらう。普淨、そして普靜という名の僧は『僧傳排韻』で調べると四人いるが、どれも玉泉寺とは関係なく、關羽との関係も無いようだ。唐代に前出の神秀の弟子に普寂という高僧がいた。

釋普寂、姓馮氏、蒲州河東人也。年纔稚弱，率性軒昂，離俗升壇，循于經律。臨文揣義，迴異恒流。初聞神秀在荊州玉泉寺，寂乃往師事，凡六年。……

(『宋高僧傳』卷九)

『演義』の普淨は關羽と同郷である。

内有一僧，却是關公同郷人，法名普淨。

(毛本第二十七回)

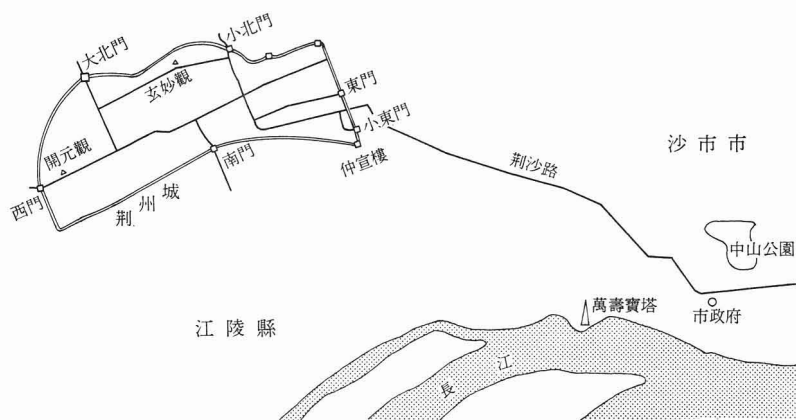
關羽の出身地は「關羽傳」によれば河東郡解縣。普寂も河東郡の人である。もちろん河東出身の僧などいくらもいるであろうから、普淨のモデルは普寂だと決めつけることは

もちろんできないが、可能性はあると考えたい。

玉泉寺の關帝廟(顯烈廟)は井上以智爲氏によれば最古の關帝廟との事であるが、『當陽縣志』の「玉泉寺圖」を見ると顯烈廟は關公顯聖碑の向かいにある。今、石碑の前には比較的新しい建物があり、案内して下さった管理局の方は、この建物のあたりに普淨が住んでおりここで關羽の亡靈と出會ったのだが、今は僧侶の宿舎となっていると云っておられた。玉泉寺境内、大雄寶殿の横に關羽父子と周倉の像があり、今はそこが關帝廟であるようだ。

私は當陽には泊まらず、その日のうちに宜昌に戻るつもりでいたのだが、玉泉寺で食事を頂いたり、法主とお會いしたりしていたので最終のバスに乗り遅れ、結局玉泉寺の招待所(つまり宿坊)に泊めて頂いた。あまりきれいな部屋ではなかったが、寺の管理局の人達、その家族と夜まで語り合い、翌日お寺の中でさわやかな朝を迎えることができ、大變楽しい経験であった。

宜昌からバスで三時間餘り。沙市市と江陵縣は隣接した



沙市市，江陵縣地圖



荆州城の東門

街である。私が泊まったのは沙市。沙市の長江沿いに萬壽寶塔という明代の七層の石塔がある。各層には半數はつづられていたが見事な佛像があり、塔の内部は寄進された石板が貼ってあるが、上の層に行くほど身分の高い人が寄進したもので、なかなか興味深い塔であった。また沙市市の中心部に中山公園という大きな公園があり市民の憩いの場となっているが、この中に春秋閣がある。關羽が春秋を讀んでいる像があることから名づけられたという春秋閣だが、昔は別の場所にあったものをここに移し、さらにそれを建てかえてから二年しかたっておらず、中には關羽の像はなく、繪があるだけだった。沙市の他にも當陽の關陵、洛陽の關林、許昌の關帝廟などにも春秋閣、あるいは春秋樓と

心部に中山公園という大きな公園があり市民の憩いの場となっているが、この中に春秋閣がある。關羽が春秋を讀んでいる像があることから名づけられたという春秋閣だが、昔は別の場所にあったものをここに移し、さらにそれを建てかえてから二年しかたっておらず、中には關羽の像はなく、繪があるだけだった。沙市の他にも當陽の關陵、洛陽の關林、許昌の關帝廟などにも春秋閣、あるいは春秋樓と

いうものがある。

沙市市と江陵縣の境界はよく分からなかった。ホテルで借りた自轉車で沙市の中心部からわずかに三十分。江陵、いや荊州城の城壁にたどり着く。西安、南京、そして襄陽など城壁の残っている所は多いが、ここ江陵の城壁のように一角の崩れもなく完璧に残っているものは珍しい。城壁は大體明代のもの。清代から現在に至るまで修復を重ねてきたものであり、東門、大北門のあたりなど大變美しい。關羽が守り、後に吳軍によって奪われた荊州城はここなのである。

先主西定益州、拜羽董督荊州事。『三國志・關羽傳』

城内には開元觀、玄妙觀という道觀があり、開元觀の中に荊州博物館がある。ここには荊州城の北から發掘された前漢の男性の遺體が展示されていた。また地圖によれば城壁の東南の角が仲宣樓だとのこと。しかし基礎部分だけで樓自體は残っていない。王粲（字が仲宣）は後漢末の人。『三國志』にも傳があり（卷二十一）、劉表の息子琮に曹操に降ることを勧めた人だが『演義』では毛本第四十四回、この王粲

## 紹介

が「登樓賦」（『文選』卷十二）を残しており、『王粲登樓』という元雜劇もある。ここ仲宣樓がその王粲が登った樓だということらしいが、「登樓賦」の内容からはどの町かは判断できかね、當陽城、襄陽城、麥城などいろいろな説があるようだ。

江陵には、これと言って三國に關する遺跡は無いが、觀光客目當てに最近作られたものがあるよりはかえって氣持よく、城壁に登って街の賑いを、そして城外の田園風景を眺めながら、三國時代の荊州に思いを馳せることができた。豫定では沙市・江陵の後、最後に赤壁を訪ね、湖北三國遺跡めぐりの旅のしめくくりをするつもりだったのだが、宜昌・沙市と激しい胃痛に苦しみ、ついに沙市から涙をのんで武漢へ、そして南京へ戻ったのである。

私は湖北省以外にも洛陽・成都などの三國關係の遺跡をいくつか訪れたが、最も觀光地化されておらず、最も收穫の大きかったのはここ湖北省のものであったように思う。これら遺跡の作られた時代や背景はまちまちであったけれ

ども、『三國志』『三國演義』というものが、三國六朝時代から現在に至るまで人々の心にしっかりと根づいていることが感じられた。また中國を訪れる機會があれば、他の地域の三國關係の遺跡も見てみたいし、湖北でもさらに詳しく調査をしたいと思う。以上湖北省の三國關係遺跡について紹介を試みたが、引用すべき文獻を引用していないとか、或いは特に今回玉泉寺に關して佛教資料を使用したのも、佛教關係の研究をしておられる方には常識と思われるような間違いをしているなどの可能性は大いにある。御指摘頂ければ幸いである。

(富山大學 上野隆三)

引用文日本語譯

(1) 劉琦は諸葛亮を連れて裏庭を散歩し、共に高殿に登って酒宴の席を設け、その間にはしごととりはらわせ、諸葛亮に言った。「今日は上は天に届かず、下は地に届きません。言葉があなたの口から出ても、私の耳に入るだけです。話して頂けませんか？」諸葛亮は言った。「あなたは申生が國內にいて危険な目にあい、重耳が國外にいて安全であったことを知りませんか？」劉琦はその意味を悟り、ひそかに襄陽を出る計畫をたてた。ちょうど黃祖が死んだことにより、襄陽から

出ることができ、江夏太守となったのである。

(2) 夏口城は黃鶴磯にあり、仙人の子安が黃鶴に乗ってこの上を通りすぎた、と傳えられる。

(3) 黃鶴樓は縣の西二百八十歩のところにある。かつて費文禱が天に登って仙人となり、よく黃鶴に乗ってこの樓まで飛んできて休息したので、黃鶴樓と呼ばれるようになった。

(4) 先主は樊に駐屯していて、曹操軍の急な來襲を知らず、宛まで來たところであつた。そこで軍勢を率いて去つた。

(5) 兩縣の民はみな大聲で、「われらはたとえ死んでも、劉使君についていきとうございます！」と叫んだ。その日のうちに泣きながら出發した。老人を助け、子供の手をひき、男も女も次々に川を渡り、兩岸には泣き聲が絶えなかった。

(6) この年、關羽は軍勢を率いて曹仁を樊に攻めた。曹操は于禁を曹仁の救援に派遣した。秋、かなりの長雨が續いて、漢水が氾濫し、于禁の指揮する七軍はみな水没した。于禁は關羽に降伏し、關羽はまた將軍の寵恩を斬った。

(7) 〔裴注〕『世語』に曰く、劉備が樊城に駐屯していた頃、劉表は彼を禮遇していたが、その人柄を憚って、あまり信用していなかった。かつて劉備を宴會に招いた時、蒯越と蔡瑁はその席を利用して劉備を殺そうとはかった。劉備はこれに氣づき、則へ行くと偽ってひそかに脱出した。劉備の乗馬の名は的盧といい、その的盧に乗って逃げたのだが、襄陽城の西

の檀溪の水中に落ち、溺れて抜け出せなくなった。劉備はあわてて、「的盧よ、今日は厄日だ。頑張れ!」と言った。すると、的盧は三丈をひととびにし、ついに通過することができた。

(8) 玄徳はあわてて馬を川の中に飛び込ませた。數歩も進まぬうちに、馬は前脚を深みにはめて前のめりになり、着物まで濡れてしまった。玄徳は一鞭くれて叫んだ。「的盧よ、的盧! 今日わしに祟ろうというのか!」その言葉が發せられるやいなや、的盧は突然水中より身を躍らせ、三丈をひととびにし、西岸に飛び上がった。玄徳はまるで雲か霧の中にいるかのような心持ちであった。

(9) 沔水はまた東に流れ、檀溪水と合流する。〔注〕檀溪水は縣の西の柳子山のふもとに發する。……城の西一里餘りを北に流れて沔水に注ぐ。一本の支流が東南に流れている。應劭曰く、襄陽城は襄水の北にあるから襄陽というのである。従って、この支流がすなわち襄水であるはずだ。

(10) 時はまさに冬のさなか、寒さは厳しく、灰色の雲がたれこめている。數里も進まぬうちに、急に北風が吹き、雪が舞いはじめた。山は玉が群れているかのように、林は銀で装ったかのようにであった。

(11) これにより先主は諸葛亮を訪問し、都合三度にしてようやく會えた。

(12) 玄が死ぬと、亮はみずから農耕をして暮らすようになり、

「梁父吟」を歌うことを好んだ。〔裴注〕『漢晉春秋』に曰く、亮は南陽の鄧縣に住んでいた。そこは襄陽城の西二十里にあり、隆中と呼ばれていた。

(13) 章武二年春正月、先主の軍は秭歸へ歸還し、將軍の吳班・陳式の水軍は夷陵に駐屯し、長江をはさんで東西の岸に陣をはった。……夏六月、黄色い氣が秭歸から十里餘りのところにあらわれ、その廣さは數十丈にわたった。それから十日餘り後、陸議は猓亭において先主の軍を大いに破り、將軍の馮習・張南らはみな戰死した。

(14) 張飛擂鼓臺は三遊洞の頂にある。土地の傳説では、張飛がこの地を治めていたときに、いつもここで兵士を訓練していたという。今は古いとりでが残っている。

(15) 先主は江南を平定すると、張飛を宜都太守・征虜將軍に任命し、新亭侯に封じた。のち南郡に移った。

(16) 劉封城は府の西北二十里、三遊洞の頂にある。漢昭烈帝の章武年間の初めに、劉封が宜都郡を守備していたときに築かれたものである。

(17) 劉封はもととは羅侯の寇氏の子で、長沙の劉氏の甥である。先主が荊州に來たときに、まだ世繼ぎがいなかったので、封を養子にしたのである。

(18) 曹操は江陵には軍の兵器や食糧があるので、劉備がここをおさえることを恐れ、物資輸送の部隊をとどめて、身輕な軍勢で襄陽に到った。先主がすでに襄陽を通過したと聞くと、

曹操は精銳の騎兵五千を率いて劉備の軍を急追し、一晝夜で三百餘里を駆けぬけ、當陽の長坂で追いついた。先主は妻子を棄てて、諸葛亮、張飛、趙雲ら數十騎とともに逃げ、曹操は多數の民衆や兵器、兵糧をわがものとした。

(19) 先主は當陽の長坂で曹操に追いつかれた時、妻子を棄てて南へ逃げたが、趙雲は幼子、すなわち後の後主を胸に抱き、甘夫人、すなわち後主の母を保護したので、みな難を逃れることができた。

(20) 先主は曹操の不意の襲來を聞くと、妻子を棄てて逃げ、張飛に二十騎を率いて追っ手を防がせた。張飛は川をよりどころとして橋を切り落とし、目をいからせ、矛をかかえて、「われこそは張翼徳なり。死を覺悟で闘おうというものは、やってくるがよいぞ！」と叫んだ。敵には敢えて近付こうとするものはおらず、そのため先主らは助かったのである。

(21) 横矛處は役所の東北五里の官橋というところにある。乾隆二十四年に邑令〔村長〕の苗肇岱が修理して石をたてた。

(22) 孫權はすでに江陵を占據し、關羽の部下やその家族を捕虜にしていたので、關羽の軍勢は逃散した。孫權は將軍をつかわして、關羽を迎え撃たせ、關羽とその子の關平を臨沮において斬った。

(23) 〔裴注〕『吳歷』に曰く、孫權は關羽の首を曹操に送り、諸侯の禮をもってその死骸を葬った。

(24) 墓の入り口の門には碑があり、漢の時の官位が記されている。

る。

(25) 玉泉寺は役所の西三十里のところにある。すなわち智者禪師の道場である。隋の開皇年間のはじめに勅令によって建てられ、寺の額が下賜された。

(26) 開皇十二年十一月、晋王の楊廣〔後の煬帝〕は揚州の總督となると、智顗禪師を招いた。……十二月、智者禪師は荊州の玉泉山に行き、七日間靜かに座禪を組んだ。その時關王父子の靈力を感じ、開基して寺を造り、乞われて五戒を授けた。

(27) 智者禪師は玉泉に至り、そこで關王が神兵を使つて寺を造っているのに感じた。

(28) 釋普寂、姓は馮氏、蒲州の河東の人。幼い頃、本性のままに行動し、意氣軒昂で、俗を離れて佛門に入り、經と律の學修にたずさわった。文章の理解力は、はるかに常人と異なっていた。はじめ神秀が荊州の玉泉寺にいと聞くと、普寂は行つて師事すること、都合六年。……

(29) その中の一人の僧は關羽と同郷の人で、法名を普淨といつた。

(30) 先主は西の益州を平定すると、關羽を荊州の總督に任命した。

なお、これらの日本語譯の作成にあたっては、今鷹眞・小南一郎・井波律子譯『三國志・Ⅱ』（一九八二年・筑摩書房・世界古典文學全集24b）、小川環樹・金田純一郎譯『完譯三國志』（一九八八年・岩波文庫）を参照した。